
流転の彼方に

鬼島真吾

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

流転の彼方に

【Nコード】

N7450E

【作者名】

鬼島真吾

【あらすじ】

「転生」第二弾です。交通事故で死んだ「私」は意識不明状態だった恋人の兄の体に甦った。2人の女との愛の狭間で苦悩する私。恋人の兄と2人の女との失われた過去とは。

第一話：涼子

その瞬間、全身がカーと燃え上がったような気がした。まとわりつく灼熱の炎を振りほどこうにも、体中の骨という骨が発する強烈な痛みがそれを許さなかった。

（やっちまった……）視野の端に電柱に激突して停まるトラックの姿と、へじやげて横たわるーさっきまで浮き浮きとした私の気持ちに共鳴するかのように快調なエンジン音を刻んでいたーバイクをとらえながら私はそう思った。

アスファルトを掴む指先の感覚も、無意識に力なくうごめく足裏の感覚も、徐々に遠のいていき、ついにはそれらをぼんやり見つめる視界自体が緋色に染まっていった。

（このまま死んでしまうのか……）薄れゆく意識の中で直感的に死を予見していた。

一方ではこれから迎えるはずだった感動の瞬間への断ち難い未練と、その時に涼子に伝えようと決意していた想いを一言も告げられないまま、この世を去っていく事への後悔の念が私の心を揺さぶり続けていた。

（死にたくない！ 10年も待たせた涼子にやっ……やっ……）
完全に視野を奪った緋色のカーテンが一段と濃くなった気がした。その瞬間、まばゆい光と共に意識が弾けた。

「……先生！ さっきから小刻みに^{まぶた}瞼が動いています。指先や頬に触ると反応も……」

「……本当だ、もしかしたら……」

「もしかしたら、何ですか！……もしかして意識が戻る……って事……ですか？」

遠くで複数の人が語っている。その中には懐かしい声も……。で

も……瞼が重くて開けられない。もう一度夢の世界に……母の腕に抱かれているような安らかな世界に……

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！ 目を開けて！ お願い目を……目を開けて！」

懐かしき声はいつしか絶叫へと変わり、耳を刺した。眠りの湖に沈みかけた意識が無理やり湖面に引つ張り上げられるような気分だった。

縫い付けられたように重い瞼を、無理やりこじ開けるように微かに開いた時、眩い蛍光灯の光が飛び込んできた。耐えがたい恐怖から逃げるように瞼を閉じた。その瞬間、体が激しく揺さぶられ、もう一度目を開けるように叫ぶ複数の声が投げかけられた。

……おそるおそる瞼を開けた。今度は蛍光灯を遮るように目の前に被さった顔が、ぼんやり見えた。

その顔が涼子だと認識できるまでには、多少の時間が必要だった。被写体にピントが合わせきれない新米カメラマンのように、何度か試行錯誤を繰り返した後、突然輪郭だけだった幻がくっきりとした画像に変わった。それは涙のせいだろうか……目の周りのシャドーが滲み、鈍色の輪に縁取られた瞳が、真っ先に私の視界に飛び込んできた。

「……………涼子か……………涼子……………」

絞り出すように発した弱々しい声は……明らかに私の声ではなかった。風邪で喉の調子が悪い時にも、野球の応援のし過ぎで声がかれた時にも、さらには遊び半分にヘリウムガスを吸っておかしな声を発した時ですら感じなかった、本能的な違和感があった。

そんな私の戸惑いをまるで気付かぬように再び涼子が叫んだ。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！……気づいたのね……本当に、本当に良かった……」

「……奇跡だ、こんなことがあるなんて……」

涼子の背後で白衣を着た男が呟いた。

(……………こいつは医者か？……………俺は生きているのか……………)

まだ霞がかかったようにぼんやりとした頭で、そう思った。私の胸にしがみついて号泣する涼子の重みが除々に実感できるようになってきた。

(……お兄ちゃん?)

涼子の口から何度となく発せられるその言葉に、不意に違和感を感じた。10年の付き合いの中でそんな呼び方をされた事はなかった。涼子にとって『お兄ちゃん』と呼ぶべき存在は、意識不明のまま寝たきりになっている、実の兄1人しかないはずだ。それがなぜ……。

疑問は次々に浮かびそして……脳裏をかすめるようにして消えていった。その理由を考えるほどの意欲と体力は、その時の私にはなかった。

眼球が動くようになって室内の様子が見えてきた。慌ただしく動き回る白衣姿が3人。1人は医師らしき男、2人は女、看護師か……。それに相変わらず私にしがみついたまま離れない涼子。ここは個室らしく他の患者の姿は見えない。入口の横には簡単な応接セット。そのテーブルの上には見慣れた焦げ茶色の涼子のバッグ。カーテンが半分だけ開けられた窓、窓の向こうに広がる灰白色の空……。事故直後に喪失感を味わった手足の感覚も甦ってきた。しかしそれは確かにあるべき所にあるべきものがあるという感覚だけで、動かそうと思っても鉛を張り付けたかのように、意志の力だけではピクリとも動いてくれなかった。

眼球運動に疲れたのか、それとも体力自体が致命的に欠乏していたのか、再び耐えがたい睡魔に襲われた。慌てて呼び起こそうとする涼子を、医師が「もう大丈夫ですから……」と制止する姿が、瞼が閉じる間にちらりと見えた。

(雨か……)意識が戻った時、最初に感覚を刺激したのは窓ガラスを打つ雨音だった。子供の頃お気に入りだった、小さな太鼓を叩く

ゼンマイ仕掛けのおもちやの兵隊。一定のリズムで……強く、弱く……耳をくすぐる音色は覚醒を促す目覚まし時計のようだった。……次を感じたのは、私の左手を包む暖かい温もり。……強く、弱く……そつと繰り返される心地よい愛撫。

ゆつくりと開いた瞳には、一瞬安堵の表情を浮かべてから優しく微笑む涼子の姿が映った。

「目が覚めた？……良かった、もう大丈夫ね……ちよと待ってて」私の左手をゆつくりとベッドに戻すと、涼子は壁際のナースコールを押し、スピーカーからの問いかけに私の目覚めを伝えた。その姿を横目で追いながら、再会をあきらめた涼子が、確かにそこにいる事実、無上の喜びがこみ上げてくるのを感じていた。

涼子と初めて会ったのは、大学の文学サークルだった。自らの才能を過信し、第二の芥川龍之介や樋口一葉を夢見る、勘違い連中――私もその一人だった。――が大半を占める中で、自分は書く事より読む方が好きと言い切る涼子は、やや異質な存在だった。定期的に発行する『白銀』という同人誌に、自らの愚にもつかない難解な（稚拙な）小説を掲載する事だけに全力を傾注するメンバーに対し、裏方として編集作業や印刷所とのやり取りをいとわないう涼子の姿に、発行責任者である部長の私が惹かれていったのは、当然と言えば当然だった。

私が大学4年、涼子が1年の時に始まった交際は、夢が捨てきれず、せつかく就職した一流銀行をたった2年で私が退職してから――書いても書いても評価されず酒びたりの荒れた生活を続けていた時期も――完全に行き詰まり、後から就職した涼子のヒモのような暮らしをしていた時期も――変わらず続いた。涼子は一貫して私の才能を信じ、拙い作品を絶賛し続けた。適齢期を迎えてからも、親戚から持ち込まれた縁談を歯牙にもかけずに私を見守り、支え続けてくれた。

そんな一途さが私を立ち直らせると同時に、いつしか私の中にあ

る決意を固めさせた。小説家としてやっていく自信が得られたら、涼子にプロポーズするという決意を。

―そしてあの日。新人にとつて最大の登竜門と言われる大きな賞の受賞が決まったあの日。（理由を告げずに）呼び出した涼子との待ち合わせ場所に向かう途中の事故だった。

一度は死を覚悟し、再びその顔を見る事をあきらめた涼子が――そこにいた！

駆け付けた医師は、瞳孔を確認し、脈をとり、胸をはだけて何度か聴診器を当てた後、自らを納得させるように小さくうなずいてから私に問いかけた。

「片桐さん、分かりますか？ 痛いところはありますか？ ご気分はいかがですか？」

（おいおい、そんなにいろいろ質問されても……………片桐……………片桐？）

「片桐……………」思わず口を衝いて出た。

「ご自分の名前ですよ、片桐祐介さん。分かりますか？」

その名前は当然知っていた。片桐は涼子の名字だし、片桐祐介は涼子の兄の名前だ……………。その瞬間、一つのありえない仮説が脳裏に浮かんだ。もしかして……………もしかして。

「涼子、鏡を……………鏡を見せてくれ」

一瞬、怪訝そうな表情を浮かべた涼子は、ちらりと医師を見て同意を確認した上で、バッグから手鏡を取り出し私の顔の前にかざした。

そこに映っていたのは、不精ひげが伸び、頬がこけ、やつれて果ててはいたが、かつて何度か会った事のある涼子の兄、片桐祐介その人だった。

その後も医師の口から質問が浴びせられた。両親の名前だの、現住所だの、年齢だの……………

すべての質問に私は小さく首を横に振り続けるばかりだった。半

分は衝撃の事実に戸惑い冷静な思考ができなかったから。そしてもう半分は……答を本当に知らなかったから。しばらくして不意に質問が止んだ。ふと見ると腕組みをしたまま医師が考え込んでいた。それから彼は小声で涼子に何か告げ、看護師を引き連れて病室を出て行った。疲れた私と涼子が部屋に残された。

「……疲れた……」

「お兄ちゃん、ちょっと待っててね。先生の所に行ってくるから」
そう言い残すと涼子までもが慌ただしく部屋を去った。一人残されると、急に湧き上がってくる不安な気持ちに胸が締め付けられた。それでも窓ガラスから伝わる雨音と、廊下からこぼれるBGMに励まされるように私は自分が片桐祐介として意識を取り戻した理由を考え始めていた。

涼子の兄、祐介とは何度か会った事があつたが、それは決して心躍る対面ではなかった。2人の両親が日本中を騒がせたあの飛行機事故で亡くなった時、涼子はまだ小学生、祐介も中学上がったばかりだった。それから彼は涼子の保護者を演じ続けてきた。そんな我が子のような涼子と定職を持たない私との交際を彼は終始反対し、私と別れて自分の所に戻るように訴え続けたものだった。

祐介自身は理工系の大学を卒業後、大手ゼネコンに就職し、もっぱら技術系の監督として工事現場を差配していた。数か月前のある夜、強風で煽られた鉄骨が見回り中の彼の目の前に落下し、バウンドして彼の頭を打った。半狂乱になった涼子が兄の大けがと入院を私に告げに来た日の事は、いまでもはっきりと覚えている。その後意識が戻らぬまま入院が続いていると聞いていた。

年齢が近いという事や、涼子という共通項はあつたが、逆にいえばそれだけの関係だった。神の所作としか思えないこの現象が、なぜ2人の間に起きたのか。いくら考えても理由が思いつかなかった。

第一話・涼子（後書き）

ようやく二作目を投稿する事ができました。物語のきっかけは不思議な転生ですが、転生シリーズならではの愛の形を描いていきたいと思います。お読みいただいて感想などお聞かせいただければ幸いです。

第二話：奈緒美

『逆行性健忘症』……それが私の病名とされたようだった。もちろん涼子のはつきりとそれを伝えたわけではなかったが、漏れ聞こえてくる医師との会話や、看護師たちの様子から当たりがついた。

自分の名前も（涼子以外の）家族や関係者の名前も覚えていないのに、日常生活は普通におくれる。――いわゆる『記憶喪失』

涼子に聞くと祐介（私）は半年近く意識不明の状態だったようだ。意識の回復を半ばあきらめていた所に今回の出来事。私が事故を起こした日からも一か月余りが過ぎていた。その間私の意識は、魂はどこをさまよっていたんだろうと思った。

「お前が付き合っていたあの男は……どうした？」

「……………」

「まだ付き合っているのか……………」

「……………亡くなったわ……………ひと月前に」

「……………どうして？」

「交通事故。やっと……………やっと小説が評価されて大きな賞をもらったのに……………。おそらく私にその事を伝えようとしていたんだと思うの。呼び出されて彼の来るのを待っていた時だから。ほとんど即死だったと聞いたわ。……………バカよね本当に……………」

最後の言葉は涙声で聞き取れなかった。

「……………でも、それからしばらくして、こうしてお兄ちゃんの意識が戻ったのよ。きっとあの人がお兄ちゃんを助けてくれたのよ……………」

（違う！俺が、俺がお前の愛したバカな男だ！）そう叫び出しそうになった時、突然、手鏡に映った祐介の顔が脳裏に浮かんだ。その顔は真実を告げる事を拒むかのようにひどく悲しそうな表情だった。私は口から出かかった言葉をかろうじて飲み込むことができた。（焦る事はない。兄の中にいるのが実は私だという事を、涼子がど

う受け止めるのかをじっくり見極めてからでも……）そう考えて私は、しばらくは記憶を失った片桐祐介として生きていく事を決意した。

半年近い病床生活で、すっかり衰えた筋力を回復すべくリハビリが始まった。最初はベッドの上での指先や足先の曲げ伸ばしからスタートし、徐々に動きを大きくするよう指示された。と同時に失われた記憶を刺激によって取り戻させようとしてか、晴れた日には車椅子で病院の庭を巡る散歩も日課となった。涼子はそれまでの仕事を辞め、病院のそばに部屋を借りて、毎日私の回復作業を手伝った。

都心に、ほど近い立地にも関わらず、その病院の庭には木々が豊かに茂り、所々に配置された花壇には花々が咲き誇っていた。木々の間を抜ける遊歩道のような小道を、涼子と2人、木漏れ日を浴びながら車椅子で巡っていると、生きている喜びに心が弾んだ。

「まあ！真っ赤なバラがこんなに……ねえお兄ちゃん、真っ赤なバラの花言葉が『真実の愛』だって知ってた？」

小さなバラ園とでも呼べそうな一角で、車椅子を押す手を止め涼子が言った。

「真実の愛か……バラのイメージだと情熱の愛って感じだけだな」

「うっん違うの。情熱の愛なんて一瞬よ。ずっと続く真実の愛の方が素敵だと思わない？」

私の事を思い出しているのかなと一瞬思った。しかし涼子の眼は遠くを見つめる風ではなく、目の前の私を真っ直ぐに見つめ微笑んでいた。青嵐せいらんが青葉を揺らしながら吹き抜けていった。

私の意識が戻った事を聞きつけて、会社の同僚（と称する人々）や友人（と名乗る人々）が見舞いに来始めていた。見舞客の半数は私の記憶喪失を知らぬまま訪れ、久しぶりの再会にも初対面のような反応を示す姿に戸惑いをみせた。初めは私への気遣いから、部屋

の片隅に呼び寄せて小声で状況を説明していた涼子も、次第にあつさり病名を告げるようになっていった。

本格的な梅雨の季節を迎え、連日の雨でお気に入りの散歩もままならなくなっていた頃、横沢と名乗る初老の管理職っぽい男性が、部下らしき数人の男たちと共にやってきた。私の事情は知っていたようで、自らを私の会社での上司と紹介した。連れの男性たちは私の同僚らしく、一人ひとりから回復を喜ぶ簡単なメッセージと共に名前が告げられた。その後横沢は涼子を応接セットの方に誘い、深刻そうに何やら話を始めた。その間にベッドを取り囲む同僚たちから工事現場での事故の様子や、その後の状況が聞かされた。

「……一回バウンドしてから当たったから良かったですよ。あんな鉄骨が直撃したら即死でしたよ、絶対。」

「アホ！ 良かったって言い方はないやろ、こんな大変な目に遭われて。……片桐先輩、ほんまに俺らの事覚えてないんですか？」

「……すまない、何も思い出せないんだ。思い出すきっかけになるかもしれないから、僕の事をもっといろいろ話してくれないか」

その一言が呼び水となって、彼らからいろいろな話を聞き出す事ができた。同期入社という男からは入社以来のさまざまな出来事が、部下だったという男からは私の仕事ぶりが、事故当時同じ現場にいた男からは事故の前後の詳しい状況が聞けた。彼らの口から紡ぎだされる片桐祐介の人間像は、涼子との事で対面した時の印象とは異なり、さわやかで面倒見の良い34歳の独身男というイメージだった。

「そつえば、奈緒美さんお見舞いに来ました？ この前、街で偶然出くわしたから先輩の意識が戻った事伝えておいたんです。記憶喪失って言ったら驚いてましたよ……」

坂田という関西弁丸出しの後輩が不意に尋ねた。怪訝そうな顔をする私に別の男が慌てた様子で違う話題を振ってきた。ふと見ると坂田が隣に立つ男から脇腹を軽く小突かれているのが見えた。

涼子との話が終わったのか、横沢が皆に「そろそろ」と声をかけた。

思い思いの別れの挨拶をして皆が部屋を出て行ってから、私は涼子に尋ねた。

「横沢って人、何だって？」

「ううん、大した事じゃないの。お兄ちゃんの事故はちゃんと労災認定されているから、これからも経済的な事は心配しないで記憶と体力が戻るまでゆっくり療養して下さいって。私も仕事を辞めちゃったし、本当はちょっと心配だったの。取り合えず良かったわ」

「そうか……涼子にも心配掛けるな……」

「何言ってるの、この世に2人きりの家族じゃない！ 余計な心配はしない事、分かった？」

「はいはい。……ところで涼子、奈緒美さんって……どういう人？」

心配事が1つ解決したからか、晴れ晴れとして上機嫌だった涼子の表情が一瞬にして曇るのが分かった。触れられたくない話題だったのかもしれないが、その変化を見てなおさらその人の事が知りたくなった。無言のままの涼子に、

「いや、さつき坂田っていう奴がその人に僕の意識が戻った事を伝えたって言ってたから……」

「……… 自称、お兄ちゃんの婚約者。どこかのお嬢さんみたい」

「自称？」

「……… だって私、お兄ちゃんからその人の事聞いた事なかったから。お兄ちゃんが入院してからしばらくは、身内のような顔をして見舞いに来てたけど、頭の怪我が治っても意識が戻らないまましばらくしたら突然来なくなったのよ…… 本当に婚約してたのだったら、そんな態度取らないと思わない？ やたら派手で……私あの人好きじゃない！」

予想もしなかった涼子の激しい反応と話の内容に驚きながらも、

私は奈緒美というその女と祐介の関係に思いを巡らせていた。奈緒美への関心が俄然高まるのを感じた。

奈緒美が来たのは、それから数日してからだ。午前中のリハビリを終え、ベッドで上半身を起した私は所在無げに本を読んでいた。涼子は買い物に出かけていた。

恐る恐るという感じで病室の扉が開き、1人の女が中の様子を窺うように顔を覗かせた。美しい顔には少し不安げな表情が浮かんでいた。

女はベッドの上の私に気づくと、病室に足を踏み入れるなり、

「……………祐介さん……………」

と呟いたまま立ちすくんだ。瞳からは涙が溢れ出ていた。それから突然女はベッドに駆け寄り、私の頭をその胸に抱き寄せた。甘い香りとふくよかな乳房の感触が、久しく忘れていた感覚を呼び覚まし胸の動悸が高まった。頭上で繰り返し呟かれる祐介の名と、吐息交じりの安堵の言葉が彼女の心情を伝えているように思えた。

しばらくの抱擁の後、体がゆっくり引き離された。彼女は両手を私の肩に置いたまま、鈴を張ったような瞳で真っ直ぐ私の目を見ながら言った。

「私は奈緒美、篠塚奈緒美。あなたの婚約者……………この指輪は婚約記念だっただけあなたがくれた物よ、覚えてる？」

そう言っただけ彼女は左手の薬指を私の目の前にかざした。それは、中央にルビーらしい濃い臙脂色えんじの石が配され、その周りがたくさんの小さなダイヤで縁取られた指輪だった。

弱々しく首を振る私に奈緒美は、

「本当に記憶を無くしちゃったの……………可哀そうな祐介さん……………いいわ、私が絶対にあなたの記憶を取り戻してあげる」

と言いながら、もう一度私の頭を胸にかき抱いた。甘い香りが戻ってきた。

その時、「ただいま！」の声と共に涼子が帰ってきた。眼に飛び込んできたであろう室内の光景に、涼子が一瞬息を呑んだのが分かった。

「……奈緒美さん？」

入口に背を向けた奈緒美に、そう問いかけながら涼子が怖々（こわごわ）と私たちの方に近づいてくるのが分かった。

「……ああ涼子ちゃん、祐介さん本当に良かったわね、意識が戻って」

恥じる事は何もないと言わんばかりに、堂々とした仕草で奈緒美は私をゆっくり離し、近づく涼子の方に向き直りながら、そう言った。

「でも、記憶が……」

「それは私がかすめるから任せておいて。記憶を取り戻すきっかけになりそうな事に心当たりもあるし……退院して少し遠出が出来るようになったら連れて行きたい所があるのよ」

「それはそうと……奈緒美さん、どうして突然来てくれなくなってしまったんですか」

涼子が胸の中につかえていたものを一気に吐き出すかのように尋ねた。

「ごめんなさい……あの時は……前に私の両親が貿易関係の仕事をしてらって話したわよね」

大きく首を横に振る涼子。

「……言っただけでなかったかしら……とにかく両親が貿易関係の仕事をしていた、私がそれを手伝っているの。あの時はちょうど大きな商談が持ち上がったって急にパパと海外に行かなければならなかったの……あの頃、先生も祐介の意識はいつ戻るか見当もつかないっておっしゃってたでしょう、だから断り切れなかったのよ。あちこち外国を回ってようやく先日帰国したばかりなの。さっそくお見舞いに来ようと思っていたら、街でばったり坂田さんに会って祐介さんの

意識が戻ったって聞いたから、急いで駆け付けて来たのよ。……でも結果的に、涼子ちゃんに祐介さんのお世話を押し付けるみたいになっちゃたわよね、本当にごめんなさい。でももう大丈夫よ」

「そんな事じゃ……………」

納得がいかないままに押し黙った涼子が、手にしたレジ袋を少し乱暴にテーブルの上に置いた。その肩が小さく震えているのが分かった。一方で奈緒美は伝えるべき事を伝えた安堵感からか、私の方を向いて、満面の笑みを浮かべていた。身にまとった大きな花柄のワンピースとお揃いの華やかな笑顔だった。

第三話：失踪

例年以上に長い梅雨が明けたと思ったら、季節はいきなり真夏を迎えていた。

体力の回復に合わせるかのようにリハビリは順調に進み、杖を使えば自力での歩行が可能な状態にまで復活していた。もともとサッカーをしていた祐介の体は思った以上に頑強で、衰えていた筋肉も見る見る蘇ってきた。長年の不摂生がたたり貧弱で、贅肉だらけだった元の体に比べれば、羨ましいほどの肉体だった。

他人の体という事で当初感じていた違和感も次第に薄れ、意識と肉体のフィット感も完璧なものとなっていった。

定期的な検査は続いていたものの、身体的にはもう大丈夫という事で病室も大部屋に替えられ、退院が視野に入ってきたように思えた。ただ（当然の事ながら）記憶喪失状態は改善しなかったが、涼子が実家から持ち込んだ祐介の日記やアルバム、見舞客からの思い出話等によって、後付け的に彼の過去が私の中で形作られていった。

涼子と奈緒美は、あれ以来競い合うように私の看病にいそしんでいた。毎日朝から晩まで身の回りの世話をする涼子ほどではないにしろ、奈緒美も2日に1度は昼間に顔を出した。

本音はともかく、献身的に世話をする奈緒美の姿に涼子の嫌悪感も少しずつ和らいできたように思えた。2人が談笑するする場面も増え、同室の患者たちからは仲の良い姉妹と間違えられるほどだった。

流転の彼方に

異常な猛暑と言われた夏がようやく終わりを告げ、秋風が吹き始めたある日、いつも以上に時間がかかった検査を終えて病室に戻る途中で、こみ合う待合室を抜け正面玄関に急ぐ奈緒美の姿が見えた。ふと壁の時計を見ると彼女のいつもの帰宅時間になっていた。厳格

な彼女の両親は夕刻までに帰宅する事を条件に、病院通いを許してくれていると聞いていた。一言挨拶をと近づく私の眼に、奈緒美の前に立ちふさがる恰幅のいい中年の男性の姿が映った。

「裕子じゃないか、こんな処で何しているんだ？」

「……………」

「……………そういえば、何ヶ月か前にもこの病院に来てたな。しばらく見ないと思ったけど、まだ来てたんだな……………店はどうしたんだ、まだ働いているんだろう。リュウマチがよくなったら、また遊びに行つて指名してやるから楽しくやろうな」

そう言つて肩に手を回しかけた男を振りほどくように、奈緒美は無言で玄関を出て行った。

後に残された男は釈然としない面持ちで、傍らにいた別の男に話しかけていた。

「何だあのやろう！　これまでさんざん指名してやったのに無視しやがって……………」

「誰だいあれ？」

「吉原のソープ嬢だよ。***という超高級店のNO.1で、あんな可愛い顔していながらサービスはすごいんだぜ。今度一緒に行くか？」

「そんな女がどうして……………」

「さあな、近くに住んでいるのか、もしかしたら下の病気の検査だったりして」

そう言いながら下卑た笑いを浮かべる男たちに対する怒りも忘れ、私は余りの衝撃に言葉を失っていた。

（奈緒美がソープ嬢？）あの慈愛に満ちた優しい笑顔、私のすべてをいとおしむような献身的な仕事と、男たちの前で体を開き、みだらに喘ぐソープ嬢のイメージがどうしても結びつかなかった。私はその場に呆然と立ちすくんでいた。

翌日から奈緒美は姿を見せなくなった。涼子が教えてもらった携

帯番号にかけても現在使用されていませんのメッセージが流れるばかりだった。昨日の事件を目撃して以来、私はこうなる事を半ば予想していた。おそらく事故直後に頻繁に顔を出していた奈緒美が突然姿を見せなくなったのも、昨日の話から察するに、今回同様あの男に会った事が原因だろうと思った。

もちろん涼子には何も話さなかった。それだけに2度にわたって信頼を裏切られた涼子の怒りは激しく、そして悲しみは深かった。「今度あの人が来ても、お兄ちゃんには絶対会わさないからね！いいよね」

人気の無くなった夜の待合室で、涼子はそう言っただけで嗚咽を漏らした。私はその細い肩を抱き寄せる事しかできなかった。

しばらくして奈緒美から手紙が届いた。そこには両親の都合で再び急ぎよ外国に行かなければならなくなった事、別れが辛いので顔を合わさずに旅立つ事、1日も早い回復を祈っている事などがせつせつと綴られていた。便せんの端々に刻印された涙の跡が、奈緒美の深い悲しみを物語っているように思えた。手紙には涼子に宛てたメッセージもあった。今度もまた突然の事でお詫びの言葉もない、涼子の事は本当の妹のように思っていた、私の事をくれぐれもよろしく願う、そして最後に……私との婚約は解消するから安心してほしいと書かれていた。封筒の底にはあの小さな真つ赤な指輪が収められていた。

じつと指輪を見つめる涼子の眼から、静かに涙がこぼれた。

秋も深まり病院の庭の木々が黄金色や朱色に染まり始めた頃、退院が告げられた。体はすっかり回復し、自力歩行はもとよりジョギングすら可能なほどだった。

退院を機に会社を辞める事にした。専門性を有する祐介の仕事を続ける事は、そもそも私には不可能だった。会社からは、記憶喪失状態での復帰となるなら専門知識の不要な職場への異動が示唆され

ていた。しかし最終的な意思を確認しに来た横沢の口ぶりには、専門家としての知識と能力を失ったままの祐介に対し、自主的な退職を促す意図が明らかだった。

労災保険からの一時金や会社からの破格の退職金、それに半分以上残っていた両親の飛行機事故に伴う賠償金やらで当座の生活への不安がない事も退職の決断を後押しした。

ちょうどその頃、大賞を受賞した私の小説が遺稿という形で発売されていた。涼子から手渡されたその本を眺めていると、忘れていた小説家としての血が騒いだ。

退院の数日前、慣れ親しんだ病院の庭を涼子と一緒に歩きながら、会社を辞めようと思っていると告げた。これからどうするのかと問う涼子に、次の仕事は記憶の回復状況を見ながら考えたいと答えたが、私は密かに片桐祐介として小説を書いていく決意を固めていた。涼子は黙ってうなずくばかりだった。

そしてもう一つ、涼子には内緒でどうしてもなすべき事があった。何としても奈緒美を探し出し、祐介との関係や婚約に至る経緯をはつきりさせる事だった。それは私がこれから祐介として生きていく上で、絶対に避けて通れない事のように思えた。体をもらった祐介への追悼の気持ちもあつたかもしれないが私自身が奈緒美の存在をこのまま忘れ去る事ができなかった。

私の退社を聞きつけ、別れを惜しんで駆け付けた会社の同僚たちにも、軒並み奈緒美の事を尋ねたが、私と付き合い合っていた女性としか知らないようだった。彼らとの飲み会に何度か彼女を連れて行った事もあつたらしいが、彼女は自分の事はほとんど語らなかつたそうだった。

見舞いの時の会話の中で彼女の名前を出して皆からいらまれた坂田にも、彼女について知っている事やあの時の事情を尋ねた。

「いやあ、僕も奈緒美さんの事はよう知りません……ただ、ある時しつこく彼女との馴れ初めを聞いたら、縁の深い取引先のお嬢さんやて先輩言うてましたで。……それから、あん時叱られたのは、先

輩と彼女が事故の直前に別れたっていう噂があつたんで、彼女の話題には触れんとこうと事前に話してたのに、僕が名前を出したから……」

結局、奈緒美の正体を探る最大の手がかりは、あの男が口にした吉原の店の名前と裕子という源氏名だった。直感的に、おそらくその店にはもう奈緒美はいないだろうと思った。その時どうやって彼女を探し出せばいいのか見当もつかなかった。

退院してからの日々は慌ただしく過ぎていった。

涼子と祐介の実家である片桐の家は2人で暮らすには広すぎるほどだった。祐介の部屋に初めて入った私はその居心地の悪さに困惑した。本棚にずらりと並んだ建築学や都市計画法の専門書の群れ、パネルにして部屋のあちこちに飾られたサッカーの試合の記念写真、収集していたのか機関車や重機のミニチュア、聴いた事もないミュージシャンのCDの山。そのいずれもが私がその部屋の新しい住人となる事を拒否しているように感じた。

そんな様子に涼子は気付いたのだろう。その家に一歩足を踏み入れた瞬間から、初めて訪れる家を眺めるように落ち着かない様子の（記憶喪失の）私に、涼子はしばらくの間、客間で一緒に寝る事を提案した。私にそれを拒む理由はなかった。

それからは、どこへ行くのも、何をするのも涼子と一緒にだった。体力増進を目的として2人で毎日ジムに通った。買い物も一緒に、映画を見に行くのも一緒だった。父親似と母親似で顔立ちも違う2人は、よく夫婦に間違われた。なじみになった商店街の女将さんたちから「仲が良くて……」とからかわれても、涼子は否定もせず恥ずかしそうに微笑むだけだった。

涼子からの頼みで私の実家にも行った。急に年老いた感じのする両親を前に思わず涙がこぼれそうになった。あなたたちの息子がここにいと叫びたかった。いや、涼子がそんな私にそっと触れてくれなければそうしていたに違いない。

自分の遺影を前にした時は、何ともいえない複雑な気分だった。涼子が遺影に向かって何事か呟きながら、一心に祈っているのが少し滑稽に思えた。――私はここにいるのに。

退院して1か月が過ぎる頃には、私と涼子の関係はこれ以上ないほど深まっていた。お互いの姿が少しでも見えないと不安になった。肉体的には兄と妹の関係を守っていたが、それすら私が望めば涼子は拒まないだろうという確信があった。知らず知らずの内に私は祐介としてではなく涼子の恋人であった私として涼子と接していた。

その怖さに気づいたのは、師走を迎えたある寒い夜の事だった。寝ていた私の布団に涼子が潜り込んできた。怖い夢を見たと言って涼子は私にしがみついていた。ほっそりとした体とはかなげな表情が私の欲情を掻き立てた。涼子を抱きしめる腕に力が入った。目の前にある半開きの唇に吸い寄せられそうになった時、不意に手鏡に映った祐介の顔と奈緒美の顔が交互に浮かんた。これまで何度も欲情を鎮めてきた『近親相姦』の文字が脳裏をよぎった。

結局、私は涼子の額に軽く口付けしただけで、何もなかったかのように寝たふりをした。しばらくして涼子が微かな溜息を一つ残して、そっと自分の布団に戻っていくのが分かった。（何とかしなければいけない）眠れぬ夜を過ごしながら、私はそう決意していた。

翌朝、私は涼子に『足跡をたどる旅』に出たいと切り出した。小学校から大学までの学校や修学旅行先、サツカーでの遠征先や就職してから働いていたという全国の現場など祐介がこれまでの人生で訪れた事のある土地をできるだけ巡って、未だに回復しない記憶を取り戻すきっかけにしたいという事を理由として説明した。

本心は涼子としばらく離れ、お互いに冷静さを取り戻せればと思ったのと、そろそろ本気で奈緒美の行方を捜さなければという切迫感からだった。当然のように涼子は同行を言い張ったが、1人の方

が強い刺激を受けられるからと、きつぱり断った。すったもんだの拳句、年末までには必ず帰ってくる事を約束させられた上で、独り旅を承知させる事ができた。

「絶対に無理はしないでね、それから少しでも調子が悪くならすぐに帰ってきてね……お兄ちゃんにまで何かあったら、もう私は生きていけないよ……」

最後に涼子はそう言いながら、不安と寂しさに溢れた目で私を見つめた。

第四話：搜索

突然の思い付きだっただけに、旅行の準備や何かで手間取り、結局家を出たのはその日の夕方になった。さつそくその足で上野に向かい、当たりをつけていた駅前のビジネスホテルを根城と決め、チェックインした。部屋に入り荷物を放り出しながら奈緒美の勤務先と聞いていた店に電話を入れた。電話番号はネットのホームページで容易に調べられた。

「はい***です。お電話ありがとうございます！ ご予約でしょうか？」

「ええ、今日は裕子さん出勤してますか？」

「……すみません裕子さん本日お休みをいただいています……でも今日は他にもいい娘こがたくさん出勤してまして、よろしければ今からでもご案内できますが……」

「結構です。明日は出勤の予定ですか？」

「……ちよつと分からないですね。明日もう一度お電話で確認していただけますか？」

「……分かりました、ではそうします」

「ありがとうございます。またのご利用を……」

（奈緒美がまだ働いている！）——その時の私は素直に、店を辞めているのではという予想が外れた事を喜んでいた。店を辞めて間もない女の子に指名が入ってきた時は、辞めたとは言わずに休んでいる事にして別の子を紹介するのがこの業界の常識だとは知りもしないで。

次の日も、そのまた次の日も同じようなやり取りが繰り返された。さすがに本当に奈緒美がいるのかと疑い始めた頃、ネットの風俗情報でこのからくりを知った。そこで次は直接、店の女の子から情報を得ようと、その翌日フリーの客を装って電話を入れた。若い娘が苦手なのでサービスのいいベテランをと指名し、きれいな奥様風と

いう店の勧めに従って1人の女性を指名した。

鶯谷の駅前から迎えの高級車に乗り、着いた店は超高級店の名に恥じない豪華な造りだった。2ケタ近い料金を払い、通されたケバケバしい部屋で待っているとボーイに呼ばれ、指名した女性と対面した。店のレベルを表すかのように美しい人だったが、少し下膨れの顔と笑うとこぼれる八重歯が人の良さを表しているような気がした。

案内された個室に入るなり、私は今回の訪問の目的と経緯を正直に語った。久しく遠ざかっているセックスへの欲求がないと言えば嘘になるが、こういう店の娘は同僚の事を話したがないと聞いていたので、私の真剣さを見せたつもりだった。

「裕子ちゃんねエ……もう2か月近くなるかしら、突然店を辞めてから」

初めは戸惑いながら、その後でじつと私の話に聞き入っていた、マリアという名のその女性は、私の話が一区切りついた所で、そう語り始めた。

「私たち年も近かったし、この店では古手の方だったから、待ち時間なんかで結構話をした方だったけど……婚約者がいるなんていう話は……ごめんなさい、聞いていなかったわ。……でもまあこんな所にいる娘は仮にそんな男がいても話しゃしないけどね」

「そうですね……それじゃあ店を辞めた理由については……」

「それもよく分からないのよ、何しろ突然だったから……でも……あれは最後に出勤してきた日だったと思うけど、ボソツと田舎に帰ろうかななんて呟いたのよー！そうそうあの娘、それまでOLさんみたいに昼間だけしか出てなかったのに、ある時から夕方からラストまでに変えたのよ。だから話を聞いたのは店が終わってからだったわ」

「田舎……」

「そう。だから田舎ってどこなのって聞いたの……そしたら群馬だ

って言ってたわ。そう言えば、随分辛そうな顔してたわね……その時は嫌な客でもいて疲れたんだらうなって思ったけど」

奈緒美の表情が目には浮かんだ。マリアの話は続いた。

「裕子って……結構いいところのお嬢さんだったんじゃないかな、ある時ね、酔っぱらった外人が店に来たのね。ーほら、この店って外人さんお断りじゃない。ー酔ってるから何言ってるか分からないで店長やボーイたちがオロオロしてたら、裕子が何かビシツと言って追い返した事があったのよ。あれ英語じゃなかったと思うけど……」

その後もマリアは時間一杯、奈緒美の、いや裕子に関する思い出やエピソードを語ってくれた。私の知らない奈緒美の姿がそこにあった。謎はますます深まっていった。

帰る間際には思い切って、親戚の者だといって男の従業員に裕子の元の住所や履歴の事を尋ねてみた。マリアもそこまででは知らなかったからだが、帰って来たのは胡散臭そうな眼差しと「分かりませんね」というすげない答えだけだった。

万策尽きた私は、探偵社にすぎる事にした。ネットで調べるとその数の多さに驚かされた。

その中で私でも名前を知っていた、ある会社を訪ねた。対応してくれたいかにもベテラインらしい初老の調査員に一通りの事情と奈緒美に関する情報を語った。

終始うつむいたまま小さくうなずきながらメモを取っていた男は、私の話が終わると顔を上げて「こんな事、私が言うべき事じゃないんですが……」と前置きしながら、

「私もこの仕事を30年近くやってますがね、その……奈緒美さんですか、本当に探し出した方がいいんですかねエ。片桐さんがお気の毒にも記憶を無くされて、取り戻したいという気持ちは分かりますが、奈緒美さんがあなたの前から姿を消したのには、余程の事情があったと思うんですよ」

「だから、それは……」私の話を片手を上げて遮って男は話を続けた。

「いやおっしゃりたい事は分かります。しかし店のなじみ客らしいその男に二度と会いたくないのなら、店を辞めるなり移るなりすればいい事だし、その事であなたに自分の正体がバレるのが嫌なら、退院も近かったんだし何か理由をつけて病院に来るのをしばらく控えて、退院してから会うようにすれば済むことでしょう。指輪まで返して縁を切るというのはそれ以外の理由があるとしたか思えないんですよ。……第一あなたが、奈緒美さんとその男とのやりとりを目撃していた事に奈緒美さんは気付かなかったんでしよう」

奈緒美の失踪に関する私の単純な推理は打ち砕かれた。

「……もちろん我々も商売ですから、調べると言われれば調べますが、その時は何があっても受け止めるだけの決意は持っていて下さい」

過去の何かを思い出すように男は遠くを見るような眼でそう言った。

「……どれくらいかかりますか？」

「調査に必要な期間は……そうですね最短で10日、そんなに難しい案件ではありません。それから……至急扱いで調べるなら料金は実費別で 万円かかります」

一転してビジネスライクに語られたその値段は想像以上に高額だった。

調査員の男からのアドバイスはもつともだったが、ここで中途半端なまま奈緒美の事を忘却するという選択肢は、私にはなかった。指示された着手金を支払い正式に調査を依頼した。

年末・年始を挟んでしまうので年の明けた1月10日には結果を伝えられるだろうと彼は約束した。エレベーターホールまで私を見送りながら男は、さっきは余計な事を言いましたと、しきりに詫びていた。

奈緒美の消息が分かるだろうという期待感と、調査員の示唆した悲しい事実を知ってしまう事への不安感が私の気分を重くしていた。(……涼子の元へ帰ろう)安住の地を求める流民のように急にそう思った。予定より早い帰宅だったが、涼子はむしろその事を喜び、満面の笑顔で迎え入れてくれるだろうと思った。街中から聞こえてくるジングルベルが道案内してくれているようだった。

涼子と二人の正月は、穏やかで楽しいものだったが、私は終始そこはかとない緊張感を感じていたような気がする。しかし涼子はそんな私の様子を察したかのように、明るく振る舞い続けた。もちろん布団に潜り込んできたりする事はあれ以降なかった。

幕の内が過ぎ、探偵社と約束した10日がやってきた。図書館に行くといつて家を出た私は焦る気持ちを抑えながら探偵社へと急いだ。

応接室で待っていると、あの調査員がファイルを手に見れた。初めて会った時よりいっくらか柔和な表情を浮かべているように感じた。「お待たせしました。見つかりましたよ。篠塚奈緒美さんは今、大宮にいらっしやいます」

開口一番そう一気に言つと、彼はファイルの書類から目線を上げ、どうだというように私の顔を見た。

「……大宮ですか、群馬じゃないんですか」

「はい、確かに彼女を見つけたのは群馬県の前橋でした。ちょうど正月で実家に戻っていました。ちなみにお母さんと2人で正月を過ごされてました。そして1月の4日に実家を離れ、大宮に戻りました。実家の住所も、大宮の住所もこちらに……」

私は彼の話を通り、真つ先に聞きたい事を尋ねた。

「それで、今何を……まだソープに？」

「いえ今は介護施設で勤務されています。お聞きしていたイメージと随分違ったので、初めて前橋でお見かけした時は別人かと思いま

したよ。さりげなく同じ施設の方に様子を聞いたら評判も良かったですよ。そのあたりの事もこちらに……」

一体何があったのだろう。ソープを辞めた事は何となく理解できたが、介護施設で働いている奈緒美の姿は想像できなかった。しかし一度遠く離れた存在になってしまった奈緒美が、もう一度手の届く処に戻ってきたような気がした。

彼の報告の中には、奈緒美の父親が彼女が中学生の頃自殺しているというショッキングなものも含まれていた。前橋で手広く建築業を営んでいた父親は、不動産不況の中で資金繰りに行き詰まり、高利の金に手を出した挙句、返済に困って全ての財産を失ったという事だった。

彼女がソープ嬢になった経緯いきさつもその辺りにあるのかもしれないと思っただ。

それからしばらくして私は突然大宮にいるという奈緒美を訪ねて行く事にした。調査によって奈緒美の居所がわかった安心感もあり、私はすぐさま彼女を訪ねて行くのがなぜかためられていた。タイミングを計るような気分にもなっていた。

暦も2月に変わるろうとしていたある日の朝。昨日までの寒風も和らぎ珍しく抜けるような青空が顔を出したその日こそが、奈緒美との再会にふさわしい日だという衝動が、突然私を突き上げた。

年末の小旅行以来、意識して一人で外出する機会を作っていたせいか、近頃では涼子もいちいち私の行動をとがめ立てするような事もなくなっていた。それでも相変わらず私の体調を気遣い、あるいは不意に私がいなくなる事を恐れるかのように不安げな表情を浮かべて送り出すのが常となっていた。その日も、夕飯までには戻るようにと告げる母のようなセリフを背中に浴びながら私は家を出た。

平日の通勤ラッシュも一段落した時間帯の電車は空いていた。窓の外を流れる雑多な都会の風景をぼんやりと見つめながら、私は奈

緒美との感動の再会シーンをあれこれ想像していた。

大宮駅に着き、駅前からタクシーで手帳に書き写していた奈緒美の勤務先の施設の住所に向かった。そこにあったのは高層マンションの群れに埋もれたオアシスのように、公園と一体となって控え目にたたずむ建物だった。建物を囲む生垣の隙間から、久しぶりの青空に誘われたかのように小さな庭でくつろぐ老人たちと、彼らを見守る少数のスタッフたちの姿が見えた。その中に奈緒美の姿を見つけるのは、あっけないほど容易だった。大きなウエーブが掛っていた髪型は、素っ気なく後ろで束ねただけの髪型に変わり、美しさを一際引き立てていた巧みな化粧は、しているのかどうか分からないくらいの薄化粧に変わっていたが、慈悲深ささえ感じさせる柔らかい、なその笑顔の主はまぎれもなく奈緒美だった。

一人の老婆に声をかけた奈緒美がふと顔を上げ、私の視線をとらえた。その眼に驚きと共に一瞬怯えの色が浮かんだのを私は見逃さなかった。

流転の彼方に

流転の彼方に

第五話：再会

奈緒美から指定された『アンブレ』という名の喫茶店は、国道沿いの雑居ビルの一階にあった。小さな看板しか出ていないその店は、昼時だというのに客もまばらで、静かに流れるBGMとサイフォンのたてる吐息だけが耳を突いた。

生垣に私の姿を見た奈緒美は、慌てた様子で駆け寄り、この店の大まかな場所と「後で行くから」というセリフだけを残して老婆の元に戻った。そのまま何事もなかったかのように世話を続け、二度と私の方を見ようとはしなかった。

窓ガラスには冬枯れのどこかはかなげな青空と、国道を行き交う車列が途絶えることなく映っている。その風景をぼんやりと見つめながら、私はさっきの奈緒美の様子を思い返していた。再会を喜ぶ風でもなく、いやそれどころか私の訪問を迷惑がっているようにさえ思えた。

初めて病院で会った時とあまりに違いすぎる反応に私は当惑していた。

そんな状態がどれくらい続いたのだろうか。奈緒美が入口のガラス戸を開ける姿が眼に飛び込んできた。目の前に置かれたコーヒースプーンも手を付けていないのに気づき、ふと口にするとコーヒースプーンはすっかり冷めていた。

「ごめんなさい、すぐに出れなくて……」注文を取りにきたマスターらしき男性に「いつものを」と慣れた様子で注文しながら奈緒美はそう言った。

「……久し振りだけど随分印象が変わったので驚いたよ。元気そうだね」

「どれくらいになるのかしら、お別れしてから……」

「ちょっと待つてくれよ。あんな別れ方はないんじゃないかな……俺の方は別れたと言われても腑に落ちないよ。一方的に婚約破棄な

んて……」

「……………」

「お待ちどうさま！」その時、奈緒美の『いつもの』飲み物が運ばれた。笑顔で受け取り一口含んだ奈緒美はカップを手にしたまま、視線を遠くへ投げ続けていた。まるでどう話せばいいのか、どう切り出せばいいのか考えあぐねているかのように――

沈黙を破ったのは奈緒美の衝撃の一言だった。

「どうやって私を探し出したの。いえその前に……あなた……誰なの？」

「……………」

「祐介さん……じゃないわよね。うつん見た目は確かに祐介さんだけど、あなたは彼じゃない。そんな事あるはずがないけど……そうとしか思えないのよ」

それから堰を切ったように奈緒美の話が続いた。

「いいわ全部話してあげる。あなたが祐介さんなら、ただ単に記憶を失くしているだけならとても伝えられないけど、そうじゃないなら受け止められるでしょう」

「あなたが、いえ祐介さんが仕事の関係で前橋に来たのは私がまだ高校生の頃だった。あなたは市民ホールを作る現場の監督で、父の会社が下請けだった。あなたは父に気に入られて休みの日なんかよく家に食事しに来てたわ。私の事も父と二人でよくからかって……」
幸せだった頃の思い出を語るかのように、優しい視線が投げかけられた。

「あなたが前橋にいたのは2年ほどだったけど、その間に父はすっかりあなたを私の将来の婿に思っていたし、私もそう望んでいた。でもあなたはその話になるといつも困ったような顔をしたわ。私の事が嫌いなのか、あるいはご両親が亡くなっている事を気にしているのかと思っていたけど、違ったわ。あなたが気にしていたのは妹さん、涼子さんの事だった」

「……涼子？」当然じゃないかと思った。両親が亡くなりたつた一人の肉親なんだから……。

「その意味が分かったのはずっと後。その時は単に妹の反応を気にする兄の気持ちかと思っていたわ。でもそんな煮え切らないあなたの態度を見て、父ももう少し時間をかけてと思っただんだと思うわ。結局白黒をつけないままあなたが東京に戻るのを見送ったのだから」

そこで一区切りを付けるかのように、奈緒美はテーブルに置かれたグラスから水を一気に飲んだ。

「あれは私が大学卒業直前の頃だった。バブル後の不景気で父の会社がおかしくなって、焦る父がうまい話に飛びついてとんでもない借金を抱えさせられたのは……そして父は家族に迷惑をかけまいとして自殺した。あなたにも遺書が残されていたのよ。もちろん現物は見てないけど、お葬式の後参列していたあなたに教えてもらったのは……私を頼むって書かれていたという事だった。あなたは生前あれほど慕っていた父の最後の頼みすら受け止められなかった。その時ようやくその理由を明かしてくれたわ」

「……理由って？」

「それは……」まだためらいを見せる奈緒美だった。しばらくの沈黙の後重い口が開かれた。

「それは、あなたが涼子さんを愛していたからよ」

「そりゃそうだろう……」

「いいえ違うの！ 妹としてではなく一人の女として愛してしまってたのよ。あなたが話してくれたのは、いつからそうなったのかは分からないけど、ご両親が亡くなってから数少ない親戚の間をたらい回しにされている内に芽生えた、お互いへの過度な依存がいつしか愛情に変わっていったのだろうってという話だった……祐介さん本当に苦しんだ。人倫に反する関係に妹を巻き込んだって……」

あの夜の涼子の行動が理解できたような気がした。退院後の2人きりの生活が涼子に昔の關係に戻るかどうかを確かめさせずにはいられなかったんだろう。でも……その時私の口を突いて言葉が溢

れ出していた。

「でも……涼子は俺とも付き合っていた！」

「えっ！」一瞬奈緒美の瞳が大きく見開かれた。

私はすべてを話すしかないと思った。私は事故に遭ってからの話を、不思議な甦りの経緯を奈緒美に伝えた。

「……やっぱりそうだったの。話し方や仕草だけじゃなくて病院での涼子さんへの接し方を見ていて違和感を感じていたの。あんな事があったのに……」私の話に聞き入っていた奈緒美がその終わりと同時に小さくため息をついてそう言った。

「私がソープで働いていたのも知ってるわよね。店を訪ねてきたのはあなたよね。あなたが私の事を聞いたボーイからこっそり連絡があつて年格好を聞いてあなただと思つていたから……実は父の残した借金には個人保証の分もあつて、全財産を放棄しなければいけない所だった。でも私は今、母が1人で住んでいる家だけは手放したくなくて債権者に掛け合つて長期の分割返済にしてもらったの。でも毎年の返済額もとても普通のお勤めの仕事で得られるような額じゃなくて……女が確実に多額のお金を手にするには他に方法がなかったわ。それから約10年、来る日も来る日も男たちの相手をし続けたわ。そしてようやく去年返し終わったの。でもその間は本当に辛かった……母のため、家のためと割り切つてたつもりだったけどあまりに辛くて、ある時祐介さんに連絡したの。その頃私精神状態が不安定で……たぶん彼はそれに気付いたのね、すぐ会つてくれたわ」

その時の祐介の驚きと心配が実感できるような気がして私は小さくうなずいていた。

「駆けつけてくれた祐介さんにすべてを打ち明けた……彼はしばらく無言で私を抱きしめていてくれた。それから不意に『俺たち結婚しよう』って言ったのよ。あんまり突然で、しかもそんな状況だったから単なる同情か憐みだと思つて断つたら……」

「断つたら……」話に引き込まれて思わず復唱していた。

「祐介さんの方でもその直前に大変な事があって……涼子さんが妊娠してしまつて……2人でさんざん悩んだ末に墮胎したらしいの。その時やつと本気で2人の関係を兄と妹に戻す決意を固めたから、私さえ嫌じゃなかつたら是非一緒になつてほしいって言われたの。それで私祐介さんをそんな状況から救い出すためにもつてプロポーズを受ける事にした。だから婚約してたのは本当。あの指輪も亡くなられたお母さんの形見だといつて後日もらった物なのよ」

時期を確認するとちょうど涼子も私と付き合いだした頃だった。そうか涼子も祐介との関係にけりをつける覚悟で……初めて2人度過ごした夜の涼子の少しおびえた様子が脳裏に浮かんだ。あまり経験がないんだなと初な女性つぶを手に入れた喜びを感じていた自分が情けなくなつた。

「あつ！雪が……」突然、奈緒美が声を上げた。窓に視線を向けると、先ほどまでの青天が嘘のようにいつしか空は灰白色に変わり、木枯らしに煽あおられるように粉雪が舞い始めていた。それは思い出を映し出す銀幕に物語が映写される直前の、ほんの一瞬を切り取つたようだった。

「婚約してからは辛い仕事も耐えられたわ。もちろん祐介は何度も自分が何とかするから仕事を辞めると言ってくれたけど、サラリーマンの彼に何とかできる返済額じゃなかつたから……でも彼はそんな仕事を続ける私を婚約者として扱い続けてくれたわ。会社の仲間たちとの飲み会にも連れて行ってもらったし、一緒に暮らした時期もあつた。でも涼子さんにだけは会わせてもらえなかつた……」時期がきたら……』と言っている内にあの事故が起こつたの」

奈緒美はいつの間にか継ぎ足されたグラスの水を一口飲んだ。私は悲しい記憶を呼び起こす事を拒むようにその手が微かに震えているのに気付いた。

「事故の話会社の人から聞いた時、すぐにでも駆けつけたかった。

でも涼子さんの反応を想像するとためらってしまったの。私の事を何も聞かされていない涼子さんは私の仕事を、いえもしかしたらそれ以前に私の存在自体を受け入れられないのではと思っただわ。でも祐介さんが涼子さんへの愛をゆっくり封印しようと思っただわ。姿を思えば、婚約者として堂々と振る舞おうと思っただわ。私という存在を見せ付ける事で、祐介さんとはもう以前の関係には戻れないんだという事を分かってもらおうと思っただわ……でも逆効果だったかもしれない」

「……どうして？」

「病院であの男に。店の常連だった男に。会っただわ。そのまま見舞いを続けていると私の正体がいつか涼子さんに分かってしまうって思っただわ、お見舞いに行くのを止めたの。でも祐介さんの意識が戻っただわって聞いて、居ても立ってもいられずにあの日お見舞いに行っただわ。でも久しぶりに見た涼子さんの目は、妹として、婚約者でありながら突然姿を消した私を非難するというより、祐介への愛情の深さを競い合うライバルを見るような目だったの……でも私は負けなかった。ライバルではなく祐介さんの妻つまり涼子さんの姉になる立場の存在として振る舞っただわ。暖かく包み込むように接していると彼女も私を受け入れようと努力してくれているのが分かったわ。もう少し、もう少しでと思っただわ、また偶然あいつに会ってしまったの……」

あの日の待合室の光景を思い出した。あの男さえいなければすべからずうまくいっていかないと、今更ながら言い知れぬ怒りがこみ上げてきた。

「でも、そう遠くない時期に退院できそうだった事はあなたも知っていたんだし、しばらく来るのを控えるくらいでよかったんじゃないかな」

「一瞬、そんな風にも思っただわ。でも……10年近くもあんな所で働いていたんだし、今後いつまた誰かと出くわす事だっただわありうると思っただわ怖くなったの。もしその時横に涼子さんがいたら、あるい

は祐介さんやこれから生まれるかもしれない子供がいたら……私には一生拭い去れないレッテルが貼られていて、そのレッテルが白日の下に曝さらされる時は周りの大切な人を不幸にするんだという事に気がついたの……それに祐介さんも記憶を失くしているから、私がいなくなっても、一実の妹の、一涼子さんと簡単に昔の関係に戻ってしまう事もないと思っただし……」

長い話を語り終えた奈緒美は視線を窓の外に投げていた。その瞳から涙が止めどなく流れているのに私は気付いた。奈緒美は……声を殺して泣いていた。

「だから、あなたは会いに来てはいけなかったの……せつかく私から」

その言葉が終わる前に私の中で何かが弾けた。その後、私の口を突いて出た言葉はどう考えても私自身が発したものではなかった。

「何言ってるんだ、奈緒ちゃん……涼子との関係を断つためだけに俺が君にプロポーズしたと思っていいのかい。君のお父さんの遺言には涼子が俺以外の誰かを愛する事ができて、その時まで奈緒美の事を愛していたら一緒にやってくれと書かれていたんだよ。」

そう、俺は自分と涼子の関係をそして悩みを、信頼する君のお父さんにはすべて打ち明けていたんだよ。お父さんは理解してくれた。

その上でいつまでも待つと言ってくれたんだ。だから俺が東京に戻る時も黙って見送ってくれたんだ。あの時プロポーズしたのはちよつどその頃、涼子にも好きな人ができて、一頼りない奴だけど、一本気で人を好きになる事が確認できたからなんだ。それから妊娠した子の父親はそいつだよ。まだ学生で生活力もなさそうなそいつの子を産むかどうか涼子はさんざん悩んで、俺にも相談してきたんだ。その時涼子との関係が普通の兄妹に戻れたと確信できたんだよ……君がソープで働いていた事だつて、お母さんと思い出の詰まった家を守るためじゃないか。第一、今の君の姿はどう見たって昔の奈緒ちゃんのままだよ。

だから改めてお願いするよ。俺と結婚してくれ」

そういつて私は内ポケットから、あの小さな真つ赤な指輪を取り出し奈緒美に捧げていた。指輪を持って出た記憶はまったくなかったが、そんな事は気にもならなかった。

涼子と付き合い始めて間もないあの頃に、涼子が私の子供を身ごもっていたという、普通なら驚愕すべき事実さえ静かに受け止める事ができた。

私は私自身の一連の言動を他人の目でドラマでも見ているように感じていた。

「……祐介……さん？」奈緒美が涙でくしゃくしゃになった顔のままで、唸るうなるように声を絞り出した。

「そうだよ奈緒美。ずいぶん待たせちゃったね、これでやっと……」

その時私の視界が暗転した。気がつくと隣の席に移っていた奈緒美に体を支えられていた。

「祐介さん、行ってしまったのね……」奈緒美が耳元でポツリと呟いた。

「……そうだね。でもさっきの言葉は俺の言葉でもあるんだからね……もう一度言っよ。結婚してくれ。病室で初めて会ったときから君を愛していた」

そう言って私は奈緒美の手から指輪をもぎ取り、その左手の薬指にそっとはめた。

しばらくその指を眺めていた奈緒美は再び大粒の涙をこぼしながら、感極まったように私の頭を胸にかき抱いた。

初めて病室で会った時のように、ほのかに甘い香りが私の鼻腔を満たした。

遠くから「ありがとう」という微かに聞き覚えのある祐介の声がしたように感じたのは、錯覚だったかもしれない。

第五話：再会（後書き）

仕事の関係でずいぶん間隔があいてしまいましたが、ようやく完結させることができました。次は短編や新たなテーマのものに挑戦してみます。激励の意味でぜひこの作品の感想をお聞かせ下さい。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7450e/>

流転の彼方に

2009年6月25日14時34分発行